

講演記録

鶴見和子「現代思想と生活記録運動」

解題

鵜飼 正樹

この講演記録は、京都文教大学図書館の鶴見和子文庫に所蔵されている「一九五七 八月五日 高知市公民館々場講演のときのテープ」とラベルが貼られたケース(図1)に入っていた、オープンリールテープを文字化したものである。ケースにもテープにもそれ以外は何の記載もなかったが、当時の『高知新聞』の記事を検索して、講演のタイトル「現代思想と生活記録運動」が判明した。講演の内容は、一九五七年八月九日の同紙夕刊に鶴見和子「現代思想と生活記録運動」として抄録されており、参考資料としてそのコピーも添付した(図2)。

この講演が、一九五七年の第七回高知市夏季大学でおこなわれたものであることも、『高知新聞』の記事から判明した。高知市夏季大学は、



図1 オープンリールテープのケース

高知県教育委員会、高知市教育委員会、高知新聞社の共催で、高知市中央公民館を会場として開かれていた、一般市民を対象とした生涯学習・教養講座で、一九五一年に始まった。一九五七年の第七回夏期大学は、八月一日から二日まで開催

され、正木ひろし、岡本太郎、茅誠司、奈良本辰也、貝塚茂樹、今東光、土方与志ら、各界の著名人二〇名が顔を揃えた。講座は毎日午前六時から七時半まで、午後六時から七時半までの二回おこなわれたようだが、講演の冒頭で鶴見和子は「暑いところをみなさん、一日お働きになってお疲れになった後」と発言しており、テープに録音されたのは午後六時からのものであったと推測できる。途中でテープ入れ替えのため録音が中断されたところがあるが、講演時間はおおよそ百分である。

当時の夏季大学は、『高知新聞』の報道によれば、今日では考えられないような盛況だった。受講者は三千名を超え、会場に入りきれない人は、別館にスピーカーを設置して収容した。始発列車では間に合わないで、貸切バスでやってくる近隣の町の団体、五十数名もいたそうだ(『高知新聞』一九五七年八月二日)。「それでも受講できない遠方や辺地の市町村からは録音をとってほしいという要望が強いので高知市中央公民館では講師の了解を求めてできるだけ講演をテープ・レコーダーにおさめる方針をとっている」(『高知新聞』一九五七年八月一日)とのことで、鶴見和子の講演も、もともとはそのために録音されたものであろう。

テープには、近くを通る路面電車の警笛音が何度も録音されている以外、ほとんど雑音は入っていない。逆にそこから、真夏の、おそらく冷房もない会場であるにもかかわらず、いかに受講生が鶴見の講演を熱心に聞き入っていたかがわかる。県庁所在地とはいえ地方の一都市がこのような講座を実施し、大勢の市民が熱心に受講したということ自体、この時代を考える重要な手がりとなるであろう。

講演中でもふれられているが、鶴見和子は一九五二年八月一日～三日、岐阜県中津川市でひらかれた第一回作文教育全国協議会に講師として参加したことをきっかけに、生活綴方・生活記録運動に深くかわっていく。鶴見和子自身が講演で使っていることばによれば、「生活記録運動にやみついた」というわけだ。協議会からひと月もたたない

同年八月二三日～二五日には、東亜紡織泊工場(三重県四日市市)を訪れ、ガリ版文集『私の家』をつくった女子工員たちと交流した。そして東京に帰るとすぐに始めたのが、生活記録のサークル「生活をつづる会」(一九五二年八月下旬から活動を始めたが、「生活をつづる会」という名称は翌一九五三年五月につけられた)だった。その後、生活をつづる会の成果として、鶴見和子編『エンピツをにぎる主婦』(毎日新聞社、一九五四年)、生活をつづる会「おかあさんと生活綴方」(百合出版、一九五七年)、鶴見和子・牧瀬菊枝編『ひき裂かれて―母の戦争体験』(筑摩書房、一九五九年)などが出版された。

鶴見和子がこの講演をした一九五七年八月は、すでに生活をつづる会を始めて五年近くが経過し、上記のうち『おかあさんと生活綴方』が出版された直後(六月に出版)にあたる。この講演では生活記録の事例として、高知県の青年団、東亜紡織泊工場の女子工員、そして生活をつづる会が紹介されており、生活綴方・生活記録について、鶴見和子なりの中間総括を、市民に向けてわかりやすく伝えようとしたものといえよう。

オープンリールテープのデジタル化は東京CDセンター、テープ起こしは東京反訳株式会社にご協力いただき、さらに鶴飼が何度も聞き直した上で、加筆・修正した。テープの録音・保存状態は良好といえないが、できるかぎり正確に文字化したつもりである。また、講演の中で引用されている生活綴方などは、可能なかぎり現物にあたった。それでも聞き取り不能、確定不能の箇所が少し残ったし(聞き取れなかった箇所は「●●(聴き取り不能)」、確定不能の箇所は「○○(カ)」と表示)、聞きまちがいもあるだろうし、確認できない出典も残っている。注も含め、以上の全体の責任は鶴飼が負うものである。

テープのデジタル化、テープ起こしについては、科学研究費補助金(基盤研究B:『普通の人の哲学』と『知識人の思想』の葛藤をめぐる戦後

思想史―鶴見和子文庫を開く」(代表・鶴飼正樹)の二〇〇八年度予算によって実施した。京都文教大学図書館、高知県立図書館、四万十市立図書館、高知新聞社データベース部には、資料収集にご協力いただいた。鶴見和子の著作権継承者である鶴見太郎さん、京都大学大学院の猿山隆子さんには、鶴見和子のライフヒストリーと思想形成について、さまざまなご教示をいただいた。とりわけ猿山さんには、出典の照合という煩雑な作業をお手伝いいただいた。記して感謝したい。

講演 鶴見和子 「現代思想と生活記録運動」

司会の女性……鶴見和子先生を、この夏季大学^①にお迎えすることができましたことをほんとうにうれしく思います。鶴見和子先生は、もう全国、あちらこちらから引つ張りだでございます。なかなか、この遠い高知県までお迎えすることは難しいと思っておりますので、ございますけれども、先生は、わたくしたちの熱意をお受け入れ下さいまして、ここにお越しいただきましたことをほんとうにうれしく思います。明日は、そうしたお忙しいお体でございますので、さっそく飛行機でお帰りにならないかなというなお忙しさでございます。もう鶴見和子先生はあまりにも有名でございますから、わたくしご紹介させていただくまでもなく、みなさんはよくご存知の方でいらつしやると思います。ご承知のように、鶴見祐輔先生のご長女としてお生まれになりました、津田英学塾をご卒業ののち、アメリカに勉強にいらして、マスター・オブ・アーツをお取りになり、コロンビア大学でさらに哲学の勉強をなさいました。そしてみなさんもご承知のあの名高いパール・バック女史と、非常にお親しいお交わりをなさったということでございます。わたくしどもとして、いちばんうれしく思いますことは、先生が綴方と母親、『エンピツをにぎる女性』^②な

どを通して、わたくしども、家庭の婦人に、今まで何の発言力もなく、希望もなかった婦人に、書く喜びを与えて下さったということです。そうしてお互いに書くことを通して、世の中を見、世の中の人たちと手をつないで、いろいろ考えていく。そうした面にわたくしたちを力づけ、伸ばしていただいた、ほんとうにわたくしたちの、第一の味方であり、指導者でございます。こうした先生をお迎えいたしまして、今からご講演を拝聴しようとしておりますので、どうぞみなさまよろしくお願いいたします(会場拍手)。

鶴見和子…暑いところをみなさん、一日お働きになってお疲れになった後を、こうしてたくさんお集まり下さいまして、どうもありがとうございます。わたくしは四国は三度目です。高知は二度目です。方々からお招きを受けるんですけれども、四国にかぎってお招きを受ける^{おとし}と、どうしてもお断りできなくなるんです。というのは、もう最初、一昨年の秋にうかがいました^③、とっても空気が甘くておいしくて、人の心が温かくて、大変にいいところだと思いましたし、それから桂浜にもわたくしの恋人がおります。坂本龍馬の銅像です(会場笑)。とても惚れ込んでしまったんです。だからまた恋人に会えると思って、とても喜んでうかがいました。

さて今日のわたくしのお話にしようと思うのは、戦後、今まで黙っていた人たち。人の前でものを書いたりしゃべったりすることのなかった、お百姓さんとか、働いている人たち、家庭のお母さんたち、娘さんたち。そういう人たちが、みんなの前でしゃべったり、ものを書き始めた。そういうことについて、みなさんと一緒にしばらく考えてみようと思います。

わたくしはこれは、今までものを言わなかった人たちがものを書き始めた、ということは、草の根のデモクラシーの思想運動だと、いうふうに考えております。この草の根のデモクラシーということばは、

奴隷解放をいたしました、解放戦争をいたしました、そしてアメリカの大統領をいたしました、エイブラハム・リンカーンが、「デモクラシーは草の根において」と、いうことを言いました。それは、ここにも植木鉢がございますが、だれでも草というものを見るときに、その葉っぱだとか枝だとか花と、いうような目に立つところを見る、社会でいえば大臣だとか、それから会社の重役だとか、その他いろいろな肩書きを持ったえらい人というのが、花だとか、草の葉っぱだとか、枝だとかいうところだ。だけれどもほんとうに社会を支えているのは、この木の底にあつて人の目に見えないところ。つまり草の根というのがいちばん大事なところなんだ。それでこの草の根の人々、つまりお百姓さんとか、働いている人とか、家庭の主婦とか、少年とか、そういう無名の人たちの一人一人をほんとうに大切に、その人たちの一人一人の考えを大切に育て、その人たちの一人一人の考えがほんとうに反映するような政治をしていくということ。それがアメリカのデモクラシーなんだということを、リンカーンという人が言ったのです。それでそれ以来、アメリカに何か新しい政治運動なり、思想運動なり、大衆的な●●(聴き取り不能)運動というものが起こるときにいつでも、この「草の根において」ということばを使うのが、ずっとリンカーン以来伝統的に使われているんです。

何もアメリカをまねするわけではないのですけれども、わたくしはやはりこの生活記録運動というものは、日本における草の根のデモクラシーの思想運動だと、いうふうに考えております。それで今、わたしたちが、大人が生活記録を書く、生活綴方を書くということ、これは戦後の現象「カ」ですけれども、子どもの教育の対象として、戦前から生活綴方教育というものがおこなわれてまいりました。これの歴史が、最初は明治以前に寺子屋というものがございましたね。寺子屋の先生が読み書き、そろばんを教えたときの、その書き方というも

のは、『庭訓往来』とか『商売往来』とか、いわゆる往来物と申しまして、手紙の文章ですね。いろいろな手紙の文章を読ませて、それを手習いした。そして、書くことのお手本にしたということがいわれております。これは結局、書くことは何かというと、自分の考えを人に伝達する、人に伝えるために書くということです。ですから、最初は非常に実用的な手紙の文章ということが、書き方、つまり綴方の元祖であるところの寺子屋教育の書き方の中で教えられていたわけです。

その後、明治政府になりました、さまざまな教育に関する法規が中央政府から出された。その中で、だんだんに「自分の考えを人に伝える」ということの中の、「自分の考えを」という部分が落とされてしまったわけです。そして「人に伝える」という部分だけが残されてしまいました、「人に伝える」ためのいろいろな手紙の文章なり、さまざまな文章の形、形式ですね、こういうときにはこういう、冠婚葬祭というようなとき、結婚のおめでたいときはこういう文章、お悔やみのときはこういう文章というような、いろんな形がございまして、その鑄型にはめて文章を書くというような、形式をならうというような形に綴方が置きかえられてしまったわけです。そして、自分の考えを述べるのではなくって、借りもののことばで借りものの思想を人に伝えるというような形に、綴方教育が陥ってしまった。

で、そのことに對してさまざま、これではいけないというような反発が起きてきたわけですけども、特に大正七年、一九一八年、第一次世界大戦が終わった年、その年に『赤い鳥』、鈴木三重吉の『赤い鳥』が発刊されました⁽⁴⁾、その中で子どもたちに、生活の中の事実をリアルに見つめて、その事実をありのままに書く、リアルに書く、具体的に書くということを提唱して、それがずっと大きな影響力を持っていたわけです。

そしてその後、今度は昭和三年に、一九二八年になりました、その

鈴木三重吉のやり方ではもの足りない人たちが出てきたわけです。これは現場で学校を持つ、子どもたちを教えている、地方の先生たちの中から、生活を重視しよう、生活に基づいたものの見方、考え方を、生活を素直に見つめて、書くことを通して、ものの考え方を育てていくと、というような考えが出てきたわけです。それが鈴木三重吉のやっていた『赤い鳥』の運動なんかとちがうところは、あるものがあるがまに見る、あるものがあるがまに見て、それを肯定するというのではなくって、「文章表現というものは、生活を耕す耕運機である」ということを言ってるんですけれども、生活を高める、それをありのままに見つめて、そしてそれを、生活の中の問題を解決していく、というようなことが生活の、生活綴方だと、文章表現の目的なんだということをお願いしたわけです。

それもとえば、凶作、東北地方に大きな凶作がございましたとき、そういうようなときに現場の教師が子どもたちを教えておりました。そしてたとえば修身教科書、国定の修身教科書の中に「おとうさま、おはようございます。おかあさま、おはようございます」というようなのがありましたね。きつとわたくしぐらいの年代の方はそういう読本でお習いになったと思いますけれども、ちゃんとした床の間があつて、お座敷におとうさまとおかあさまがきちんと座つて、そこに子どもたちが三つ指をついてお辞儀しているような絵が描いてございました。その国定教科書を先生が教えた。そうしましたら翌朝、子どもが家へ帰つて、朝起きて、それお百姓さんの家ですね。むしろを、ちょうど板ぶきにむしろなんか敷いて、お座敷もありやしない、床の間もありやしないようなところですね。日ごろ、「おつとう」「おつかあ」なんて言ってるような人たちでしょ。そこへ朝起きて、「おとうさま、おはようございます。おかあさま、おはようございます」と言つて子どもがおじきしたものですから、おとうさまとおかあさまは腰を抜かし

てびつくりしてしまった。つまり「おとうさま」「おかあさま」なんて言われたこともないわけですし、そんな朝の挨拶をされたこともない。「まるでうちの子どもは気がちがつたんじゃないだろうか」とまで言ったという話があります。そういうようなことを、だんだん認識するうちに、先生たちは「これはおかしいのではないか。この中央からおしつけられた国定教科書の中に書いてあることは、書いてある文章というもの、その地方地方の、たとえば東北の農村、山村、漁村といううなところには、あてはまらないではないか」、ということをし、疑問を持ち始めてきたんです。そしてつと子どもに生き生きと自分の目で、生活を見させて、そしてものを考えるような子どもを育てよう、というようなところから、この生活綴方という考えが出てきたんです。

しかし、これはちょうど一九二九年の恐慌のころを前後致しまして、いろんなところに、北は北海道から南は鹿児島、そしてこの高知の生まれでいらつしやる小砂丘忠義^{ささおかちゆうぎ}さん、小さい砂の丘と書きますね。小砂丘さん、これはもう今はお亡くなりになった方ですが、この方なんかが中心になりました、東京で『綴方生活』⁽⁶⁾という本、雑誌が出ました。でこれを、ちょうど『綴方生活』という雑誌が出たことを前後して、北海道から鹿児島に至るさまざまな土地で、農村からも山村からも漁村からも、現場で子どもたちを教えている先生たちが、生活を見つめてその中から子どもを考え方を育てようと、いうような考えが、さまざまな形で生まれてきたわけです。これはだれが申しあげたというのではなくって、その地方の、それぞれの生活に根ざして、そして自分たちの独創的な考えで先生たちが教えてきたわけで、その中には郷土主義の綴方とか、あるいは調べる綴方とか、いろいろな名前で、生活主義の綴方とか、いろいろな名前で、それぞれいろんな考えで先生たちが押し進めていたわけです。それが今度は、お互いに連絡が最初はなかったわけですが、子どもたちが書いた文章を文集に、ガリ版の文集に刷って、

それを互いに送りあうとか、あるいは手紙を書きあう、というような形で先生方が横の連絡をつけてやっていったわけです。

この、こういう形で生まれてきた生活綴方の教育、といいますか生活綴方運動、というものが、今まで、明治以来日本でおこなわれた思想運動の、思想運動とは非常にちがつた形をもつて展開された、ということが大事なことだと思ふんです。というのは、今までの思想運動というのは、あるいはイギリスから来る、あるいはアメリカから来る、あるいはソ連から来るというような、いろいろな外国の思想を、だれか学者なり何なり、肩書きのある人が輸入してきて、そして中央から地方に流し込むと、いう形で思想運動は今まで展開されてきたわけですけれども、生活綴方教育の運動は、現場の先生の間から生まれてきた。しかも、その地方地方の特殊な生活環境に立脚して、それをきりひらいていく方法として生まれてきた。この地方性と、それからそれがさまざまな形を持っていた、つまり多様性と申しますか、そういういたものが特徴であつたわけです。そしてしかも、何も肩書きとか、それからお役人の手をへておこなわれたものではなくって、純粹に民間の運動であつた、ということが非常に大きな特徴であつたわけです。

ところがちょうど太平洋戦争が始まります一年前の一九四〇年ごろから、非常にこの教育界でも大きな弾圧がございまして、こうした生活綴方の教育をしていた先生たちが、検挙されたり牢屋にぶち込まれたり、あるいは教職から追われたりして、散り散りバラバラになつてしまったわけです⁽⁷⁾。

ところが戦後、この運動がまた、今度は復活してきたわけですが、今度は子どもたちの綴方だけでなく、大人もまた生活を見つめてありのままに書く、その中から自分たちの考えを、思想を育てていくという運動として復活してきたわけです。これは子どもの場合には「生活綴方」と申しまして、大人が書く場合には「生活記録」というふ

うに最近では区別して言っておりますが、これはだいたい同じものであるわけです。ただ子どもの場合と大人の場合の区別であるわけです。

さて、これからは大人のことになるんですけれども、わたくしがその生活記録運動にやみついた、これは非常に個人的な動機ですけれども、そのことからちよつとお話したいと思っております。この大人が生活記録を書くという運動は、ちよつとサンフランシスコの講和条約が結ばれました一九五一年頃からぼつぼつ始めてきた運動です。そのことに相当のわたくしは意義があると思うんですが、戦争直後の民主主義のお祭り騒ぎがいちおう、しりぞいて、そしてまがりなりにも日本が独立したというときにわたしたちが、いったい戦争によって何を学んだのか、という反省が生まれてきたんだと思うんです。そのときにちよつと『山びこ学校』、無着成恭さんの『山びこ学校』が出ましたし⁽⁸⁾、また国分一太郎さんの『新しい綴方教室』⁽⁹⁾という本が出まして、ことに『山びこ学校』が非常にわたしたちに大きなショックを与えたわけです。

で、わたくしがやみついたというのは、先ほどもご紹介いただきましたように、わたくしはアメリカの大学で勉強してきたわけです。そして日本に帰ってまいりまして、非常にこう何ていうか、自分がちがつていうか、役に立たないということを、とても感じたわけなんです。というのは、自分がせっかく勉強、せっかく勉強しておかしいですけども、せっかく勉強してきたことが、何も役に立たないんじゃないか、という無力感を感じたんです。というのは人の気持ちがわからないということなんです。わたくしは、人の気持ちがわからないというとずいぶん変な言い方なんですけれども、お百姓さんとか働いている労働者とか、それから労働者のおかみさんとか、それから普通の家庭の奥さんたち。そういう人たちがいったい何を考えているのか、どういうことを問題にしているのか、ということが、自分でよくわから

ない。そして何かアメリカで勉強してきたときの問題意識を持ち込んで、それをコツコツと自分が勉強している、ということが何かそぐわないし、そらぞらしいという感じがあつて、やりきれなくなっていたんです。ちよつとそのときに中津川で開かれました第一回作文教育協議会⁽¹⁰⁾というものがあつまして、無着さんや国分さんにお目にかかつて、そのとき現場の先生たちのお話をうかがっているうちに、何かわたくしは「これだ」というような感動を受けたんです。

それはどういふことかと申しますと、わたくしはやはりこの明治以来の日本の学問、思想の受け入れ方、思想のあり方というのが、何か学者とか文化人とか、そういう人たちが、明治以来、外国の思想を翻訳して日本に移して持ってきた。そのときに、学者だとか文化人だとかいわれる、そういう人たちが、日本人であろうということを忘れていたのではないか。少なくとも学者の立場、思想家の立場でものを見るときに、外国人の目で日本という対象を、および日本人というものを見ていたのではないか、という気がするんです。それは気がするだけではなくて、たしかそうではないかと思うんです。たとえば、よくわたしたち、これはわたくし自身もよく言うんですけれども、「日本では」とか「日本人は」ってことをよく言うんです。そして学者が実態調査をするときも、戦後の、戦後、非常にはやりまして、農村に出かけていたり、山村や漁村に出かけていって実態調査ということをやるんです。お百姓さんの生活はこうだとか、漁民の生活はこうだ、というような調査に出かけてまいりました。そういうときに、日本人は、農村は、封建的である、日本人は封建性を持っている、農村の貧困性はどうのこうの、というような、封建的とか貧乏ということばがたびたび言われますけれど、そのときに常に「日本では」とか「日本人は」ということを必ず言うんです。それは非常におかしなことだと思ふのは、たとえば何も山村や漁村や農村に出かけていかなかったても、封

建的なことはたくさんあるんだと思うんです。たとえば大学の中でも親分子分関係が今でも跋扈している。学閥というものがある、ということや、そうした研究室の中の封建性。あるいは外で男女の平等とか自由とか、えらい、大変立派なことをおっしゃっている先生方が、お家にお帰りになれば「オイ、コラ」というようなオイコラ亭主なんですね。そういった、非常にちぐはぐなものを、自分自身の中に学者や、文化人もまた、封建性を持っている。そうしたものをいちおう疎外してしまつて、自分というものを外側に、日本の外側に置いて、「日本は封建的である」、「日本は貧乏である」、というふうに、いつも外側の問題としてこのものを見る。それが非常に客観的なものの見方である、というふうなふうに、まちがって考えてきたんじゃないかと思うんです。で、それはやはり明治以来の直輸入の思想を受け継いできて、そして外国人の目で日本を見ていたということの誤りではなかったかと思うんです。

このことはわたしたちが戦争という体験の中から、戦争に負けたという体験の中から、わたしたちは、なんか今までの日本の、日本人の思想、学問のあり方に、まちがっていたところがあったんじゃないか、ということを考え始めたんじゃないかと思うんです。というのは、このデモクラシーが来れば民主主義、民主主義っていつて、今度は軍国主義になれば軍国主義と、それがいいものだというし、またアメリカの占領下になれば、アメリカ主義というものがいいものだというふうにな、あっちに行ったりこっちに行ったりするということ。つまり根なし草だと、わたしたちの思想のあり方が根なし草だということともつながっていると思うんです。つまり自分自身の生活における行動とは、いちおう切り離れたところで、思想をもてあそんでいたということが、わたしたちをやはり戦争へ、まちがった戦争へ導いたひとつのきっかけではなかったか、というような反省が、やはり一九五一年の講和条

約が結ばれた当時からわたしたちの中にボツボツと出てきた考え方だと思うんです。

で、そうしたことに対して、この生活綴方、子どもたちの書いた生活綴方はどういうつながりがあるかと申しますと、わたくしはこの作文教育協議会というところに行ったり、また『山びこ学校』を読んだりしてショックを受けたわけなんです。それはどういふことかといううと、学校の先生たちが村の中に入っていく。たとえば子どもたちが、お弁当を持ってこない子どもたちがいる、というようなことを見たときに、「だから農村は貧困である」とか「封建性だ」というふうなふうに決めつけないで、なぜ子どもがお弁当を持って来られないのか、というふうなことを今度は自分自身をその村の一人、村人の一人として調査していく。それじゃいったいどんなものを村の人たちは毎日食べているのか。どうしたらもう少しいい食べ物を食べることができなのか、というふうなことを自分自身につらなる問題として考えている、ということにわたくしは打たれたんです。

これをわたくしは五年前に「自己をふくむ集団の問題として問題を見る態度」というようなことはで言っただけです¹⁾、やはり学者なり思想家なりが、自己をふくむ集団として日本及び日本人を見るといふ態度に立つのでなければ、思想なり学問なりはほんとうに役に立つものにはならないんじゃないか。というのは、いくら農村調査したり漁村調査したりして「日本は封建的である」とか「貧乏である」と言ってみたところで、その調査をしている学者なり先生なりの生活が、封建的な生活の上にあぐらをかいている。あるいは研究室の中に親分子分関係が続いている。そしてそれを全然自分では気がつかない。あるいは関係ないものとして見ていることであれば、その先生がいくら勉強しても、それはその先生自身の人間の成長には役に立たないし、それからまた調査された対象であるお百姓さんや農民の生活にもおそ

そうです。だけど何しろね、そんなふうにして、ずっと書いてきたって言うんです。

で、わたくしはそれを聞いたときにね、とってもおもしろいと思っただんです。おもしろいっていうのは大変失礼ですけどね。これは男も女も共通することじゃないかと思って、ほうぼう調べてみましたら、たとえば台湾に行っていた巡査。今はずいぶんおじいさんですけども、その人がずうっと日記をつけていたということや、あちらのおばあさんが日記つけてた、あちらのおじいさんが日記つけてた、いろんな人が日記つけてたということがわかって。それはみんなタンスの底、みんなしまい込んで、人に見せないようにつけてたんですね。で、そのことはどういふことかというね、わたくしはやはり人の前ではつきりこう立ち上がったものを言うのと、いうことのできない社会ね。こんなことを言ったらけんかになる。こんなことを言ったら家を追っ出なくちゃならない。こんなことを言ったらクビが飛ぶ。こんなこと言ったらにらまれる。ビクビク、ビクビクして女も男も生きているような、抑圧の多い社会では、ものを言うかわりに、そしてヒステリーになるかわりに、書く。書くことによって自らをなぐさめると、いう習慣が相当いきわたっていたんじゃないかというふうに思うんです。で、そういう意味で、日本人は相当、日記を書くとか、手紙を書くとか、そういう習慣が他の国の人よりもわたくしは多かったにちがいないと思うんです。

ところが終戦後、書くようになったときに、生活記録といわれているものを書くということは、日記を、今までそういう人たちが日記を書いていたということとは相当ちがうことだと思うんです。というのは今までの人は、人に見せないように、自分をなぐさめるために、あきらめるために書いていたわけです。ところが終戦後、わたくしたちが書くようになってからは、あきらめるために書くのではなくって、自

分はこんなに困ってる、苦しいことがある、悲しいことがある、うれしいことがあるっていうときに、それを人に訴える、そして人に共感を持つてもらって、そして人と一緒に行動をとつてものごとを解決するために書くということに変わって、目的が変わってきたんだと思うんです。そのものごとを解決するということは、自分一人では解決できない。だから他の多くの人たちに呼びかけて、そしてみんな同じ気持ちになつてもらって一緒にやろうじゃありませんか、という形でものを書いていく、ということになったと思うんです。ですから今まではひとりごとであつた。あきらめのために書かれたひとりごとであつた。それに対して終戦後の生活記録運動の中でものが書かれるときには、人に伝達、最初は手当たり次第に伝達するために書くといわれた。目的があつたと申し上げましたが、その伝達という意味がもう一度復活して、自分の考え、自分の体験を人に伝達して、それを人に協力と呼び起こす、共感を呼び起こして、そして解決するために、協力するために書く、ということになったんだと思います。これは今まではバラバラの個人が、ひとりごとを言っていた。それに対して今度は、集団と申しますか、何人かがグループを作つて、仲間を作つて、そしてその中で話しあつたり、書きあつたり、一緒に考えたり、一緒に行動を起こす、という集団的な仕事として書くという仕事が出てきた、ということだと思うんです。つまりその集団性ということと、協力性ということと、それからものごとが解決するまで、この書くという仕事を粘り強く書くことと、書きあい、読みあい、話しあい、そしてまた行動を起こしていくというふうに、ものごとが解決するまで続けているという持続性、ということが戦後の生活記録運動の中でのものを書くというときの特徴だと思うんです。

それでどんな生活記録が書かれて、そしてどんな新しい考えが育っているか、ということ、時間の許すかぎりお話してみたいと思うん

ですけれども、最初に農村の青年の間で、これは青年学級だとか、それから青年団というようなところで、さまざまな生活記録が書かれております。そこで今日お話し、ひとつだけ例をあげてみたいと思うんですけれども、それはみなさんご承知だと思えますけれども、高知県の津大村、須崎というところ^⑬の青年学級で、一九五二年から始まったそうですけれども、五年間続けていらつしやる『夜学会』という生活記録の機関紙です^⑭。これを最初にこういう『夜学会』という生活記録の機関誌の中にこういう詩が出てきたんです。「死んだ方が良いんぢやないか」。これはもう長い詩ですから、わたくし、ちよつとだけ読みます。

麦めしのべんとうで今日も山に行つた

冬の短い日はくれてしまつた

重い足をひきずつて戻つて来た

となりではうたつてゐるようだ

ラジオをかけてゐるのだ

耳をかたむけてゐると

すぐれた残念だ

一日中いや毎日六十才かいおやぢと

二人きりで炭焼をしている

それから後、略します。そして最後が

こんな生活はいやになつた

だれがわるいのか

バカヤローのバカヤロー

こんなこと云つても仕方のないことだ

いつそのこと死んだ方が良いんぢやないか^⑮

ということとで終わつてゐるんです。いかにもこの、やけを起こしているという調子がよくわかります。この詩が、炭焼きの青年の詩が出てきましてから、二十五名ばかりの、男と女と含めて二十五人ばかりの青年学級で話しあいをしたんです。そして、この家ではお米が一升に麦が一升五合入つた麦飯を毎日食べているということがわかつたんですけれども、豊年なのになぜ百姓は麦飯を食べなければならないのか、というようなことをみんなが問題にして、なぜ肥料代が高くて、そしてお米の代金が、お米の値段が安いのか、なぜお米を作るっていうことはこんなに引きあわないのか、というようなことにまで議論が展開いたしました、よくわからないことがいろいろ出てきたものですから、「お米について勉強しよう」といって大学の先生を呼んできて、みんなでお米についての学習を始めたわけです。

それから五、六カ月たちまして、今度は仲間の中からもうひとつ別の詩が生まれてきました。これもまた大変長い詩なので、途中を省略して読んでみます。これは「石かけ」という詩です。石垣なんです。

下から一つ一つ

順序よく積み重ねられた石かけ

俺の背丈の二倍もある様な

長い長い石かけ

その石かけが段々に続いて

俺の家の たんぼを支へてゐる

だから この石かけが

俺の一家の生活を支へてゐる様なものだ

俺の一かかへもある様な大きな石が

何百も重なって積み上げられてゐる
今から三十年前

おふくろと死んだ親父が

年とつた祖父を相手に

夏の暑い時に

みんなが 日よけして 休んでゐる時に

下の川から 一つ一つ石をあげた

働きのひまをみつけては つきあげた石かけなのだ

高い地代金を払うために

山へ行つて働きながら

高い加地子の小作地を作りながら

其の合間に高い石かけを積み上げた

そして とうとう 三反八畝二十九歩の

自分の土地を作りあげた

「せめて モチ米だけでも自分の田からとれる様になつたら」

そんな事をたのしみにして親父らは

この高い石かけを積み重ねたらしいぜ

と、今度はおやじさんが戦争中に栄養失調で死んだことを書いてます。そしてこの

だから この石かけが

親父の 全生涯だつたのだ

親父や おふくろが

「二度と俺達の生活の子供にはやらすまい」

そう希つて のまず喰はずの状態で

最後の石かけをついていた頃

この馬鹿者の俺は

「大君の為に、いさぎよく死ぬる事」だけを

たつた一つの精神のささへとして

勤勞奉仕や防空壕掘を

中村でやつてゐたのだ

石かけの様に積み上げる

親父らのささやかな 生活への希望も知らずに

今年も俺は

みんなより仕事のおくれた田の中で

牛の尻を追つてゐる

三反八畝二十九歩の

親父が残してくれた たんぼを守るのがやつと

それでも この高い石かけは

「がんばれ！」と

俺に云つてゐるみたいだ⁽¹⁶⁾

という詩が出てきたんです。

これは最初の詩と相当ちがつています。最初のはひとりごとといひますか、やけのやんばちゃんですけれども、今度のは、ひとつは数量的細部があるっていうこと。「三反八畝二十九歩」というのは、もう一分一厘すきのないような数量を、ちゃんと何回もこれを出しています。そういうこと。それからもうひとつは歴史に対する見方といひますか、自分が今耕している非常に貧しい田んぼだけど、この貧しい田んぼを自分のお父さんもお母さんも、そしてお祖父さんも、生涯をかけてひ

とつひとつ築き上げた、その田んぼを自分も耕しているんだ。だから●●〔聴き取り不能〕ということがひとつと、それから自分がやっぱり戦争のときにまちがっていた、ということ。戦争を一生懸命やっていた。協力していた。そしてそうして働くために、自分が協力している間に、お父さんやお母さんは営々としてこの田んぼを築き上げてきたんだ、ということへの反省から、今度はもう一度こういうまちがったことはない。これからはお父さんやお母さんがのこしてくれた、この田んぼを自分が守って、そして一歩ずつ、少しずつ、粘り強く生活をよくしていくために働くこう、というような歴史の見通しが出ているわけです。この詩が、前の詩とこの詩の間では、やはりなぜこの詩が出てきたかというところ、お米の生産についての勉強をする。そして仲間というのが、だんだんに固まってきて、その仲間の支えを通して、この人が歴史に、粘り強い歴史観を持つ、粘り強い形で自分で働いていこうという精神の支えが出てきた。最初のは、ひとりごとでやけのやんばちを言っていたというようなことがいえると思うんです。

まだ青年の生活記録というのはいろいろありますけれども、農村の青年の場合はこれだけにしておきまして、次に職場の記録の、これもひとつの例といたしまして、もしかしてみなさまの方にご承知の方もあるかと思いますが、四日市の紡績工場こうばで働いている娘さんたちの作っている「生活を記録する会」というのがあるんです。そこでこの六年間、「母の歴史」という記録運動をやっております¹⁷。この『母の歴史』という本も出ておりますが、これはどんなのか、どういうところから始まったかと申しますと、これは紡績工場こうばで働いている人は九割、九九%までが農村の出身です。農村の家が貧乏なために、仕送りをするために、紡績工場こうばに働いてくるわけです。ところがこの人たちは、中学校、今は義務教育が中学校まで延長されましたから、昔は小学校だったわけですが、中学校を卒業するときに「上の学校に行

きたい」と、これはだれだっと思うんです。「上の学校に行きたい」という気持ちをみんなが持ったわけです。で、わたくしは記録運動を始めたときに、これはあの、非常にこれが強いことは感じたんですけど、たとえば紡績の人たちが「わたしは上の学校に行きたかったのよ。だけど経済的な事情が許さないので紡績工場に来了。そのときにね、親を一生うらんでやる、そう思った」って言ってます。つまり上の学校にやつてもらえなかったということを一生うらんでやる、という気持ちで紡績工場に来了たっていうんですね。そしてこれは上の学校に行けなかったっていうことが、何かこの、人間の色分けをするような気持ちを持っているわけです。

わたくし、このインテリと大衆の間にギャップがあるとか、そういうようなことをいわれますけれども、インテリっていう、大衆っていうのをどういうことで区別するのか、というのを考えてみますと、義務教育だけ受けた人が、大衆というふうにいわれるとすれば、義務教育以上の教育を受ける、まあ特権ですね、そういう、受けることのできた人。それがインテリというふうにな、はつきりしたペンチマークを引いてみれば、そういうことになるんじゃないかと思うんです。けれども、その「上の学校に行けなかった」ということがうらみになって「どうしたって勉強したい」って気持ちがとつても強く動いているわけです。そこでこの紡績工場に入った人たちは、なんとか勉強する機会を、自分たちで勉強する機会をつかみたいって気持ちがあつたわけです。

で、みんなで話しあっているうちに、最初は自分だけが、自分の家だけが貧乏で、そして自分だけが家に仕送りしなくちゃならないんだって思いこんでいたんですけれども、みんなで話しあってみたら、あんたも仕送りしてる、あんたも仕送りしてる、あんたもって、みんな仕送りしてるじゃないか。それだったらわたしたちが貧乏じゃなくて、あんたも貧乏、貧乏、貧乏、みんな貧乏じゃないか、ということが、だ

んだんにわかってきたんです。そうしたら、それじゃ貧乏なんて、最初は貧乏ってことははずかしいと思っていたのが、貧乏なんてはずかしくない、っていうところまでわかったんですけれども、それでもやっぱり貧乏はたまらんから、どうにかしてこの貧乏から抜け出そう。そのために勉強しよう。どうしたら貧乏から抜け出せるか、その勉強をしよう、ということになったんです。で、ちょうどそのときに『山びこ学校』を読んでいたもんですから、『山びこ学校』の子もたちのように、自分の家の貧乏話をありのままに書くじゃないか、ということになって、みんな『私の家』ということを書き、詩を書いたんです。これはわたしの家には田んぼがどれだけあって、家族は何人で、肥料代はいくらで、お米の代金はいくらで、いくら赤字になるといような、非常に細かい数字をあげた綴方を出してきたんです。それを勉強しているうちに、今度は、みんなが考えたことは、わたしたちは今こうして工場にいるけれど、いつか農村に帰ってお嫁に行くんだ。そのときに今までの農村の、わたしのお母さん、わたしたちのお母さんたちはほんとうに貧乏でみじめだった。だからわたしたちのお母さんたちよりは、もう少し幸せなお母さんになるためにはどうしたらいいか、ということをもみんな考えてよというって、『私のお母さん』『母の歴史』を書いたんです⁽¹⁸⁾。

そのときに娘たちが言ったことは、「もしもわたしのお母さんたちが有名な女の人であつたらば、だれか後世の作家なり歴史家なりが伝記を書いてくれるだろう。だけれども、名もない農村の母親であるわたしのお母さんのために、娘である自分以外にだれが伝記を書いてくれるだろうか。わたしは親孝行のつもりでお母さんの伝記を書きました」と言つて、お母さんの身の上話を子どもたちが書いてたんです。

その中にこういうのがあるんです。お正月、暮れ、お正月に家へ帰りまして、お母さんに布団の打ちかえ、布団の直しを手伝っていた。

そしたらお母さんが真綿を引つ張れないのですという綴方なんです。それはどういうことかと申しますと、お母さんはお嫁に来るときに、白魚のようなきれいな手をしていた。そのときには心も体も、心もやさしかったし、それから手先も器用で、いろいろな手芸やなんかも作ってくれた、やさしい、いいお母さんだった。ところが戦争でお父さんを失つて、そして自分で働いて子どもたちを育てなければならなくなってきた。そのために、つらい労働のために、お母さんの体も心も荒れてしまった。そして白魚のようなきれいな手が、今ではひねしようがのようなささくれだった手になっている。ですからねこう、引つかかっしてしまつて真綿が引つ張れないのですと書いてあるんです。戦争でお父さんを失つただけでなくつて、お父さんの、お父さん、お母さん、つまり舅さんや姑さんにずっと仕えてこなくちゃならなかった。つまり封建的な人間関係の中にしばらくいられた。そうした不幸なお母さんを、こんなお母さんにしてしまった。それはお母さんが悪いのではありませんかと書いてあるんです。で、それはお母さんが悪いんじゃない、戦争による不幸、それから封建的な人間関係による不幸というのが、お母さんをこんなに荒びさせてしまったんだ。だからほんとうにお母さんに対する孝行をしようと思えば、戦争がないようにするということ。それから封建的な人間関係をよくしていく。それからつらい、いくら働いても、働いても報いられないこのつらい農村の労働を、もっと報いられるものにしていくということ。つまり、それが親孝行なんだということをお母さんが考えたんです⁽¹⁹⁾。

で、親孝行ということを、戦後、修身科がなくなったために、青年が、若い人たちが親不孝になったということを、よく年を取った方たち、ことに農村の方たちは心配していらつしやいます。けれどもわたたくしは子どもたちの綴方を読んだり、また工場で働く青年や娘たちの綴方を読んだり、その人たちの話すことを聞いて、けつしてそうじゃないと思う

んです。わたくしは今までより以上に親のことを、若い人たちは考えてると思うんです。ことに働く人たちが、親のことを一生懸命考えてる。それは親孝行しなさいというおしつけの道徳がなくなったために、ますます考えるようになったと思うんです。それはどうしてかというのと、親だから孝行するのではなくって、わたしも働いている。工場ですらいい思いをして働いている。親も働いてるじゃないか。親が働いてわたしを育ててきたんじゃないか。だからわたしは同じ働く者なんだ。働く者同士の共感によって結ばれた痛み、気持ち。それが新しい親孝行の基礎になっていると思うんです。だから一対一の関係で、自分の親、自分の子どもというような関係ではなくって、親、親というものの、親孝行というものを社会的な視野に広げて、若い人たちが親の問題をほんとうに真剣に考えている、ということが言えると思うんです。

そしてこの娘たちはもうひとつ最後にお母さんの不幸の原因を数え上げたんですけど、それはお母さんが好きな人と結婚できなかったから不幸になったんだ、ということなんです。だから自分たちはほんとうにいい相手を見つけて、よく知りあって、人生の目的が同じくできるような人と結ばれる。そして自分が幸福になる。ということがまた親も幸福にすることなんじゃないか。そしてそういう人たちと結ばれて、ほんとうに村の生活をよくしていく、ということが親孝行なんじゃないか、というようなことを考えているんです。ここでもずいぶん気の長いことですけども、すぐによくしていくと、すぐに村をよくしていく、というようなことはできないんだ。お嫁さんになったら我慢しなくちゃならないんだ、ということをはっきり考えてるんです。お母さんがお嫁に来てから二〇年間、黙って黙々として働いてきて、やっ自分主婦権というものを持って発言できるようになった。だからわたしもお嫁に行ったら二〇年ぐらいいはおそらく辛抱しなくちゃならないんだらう。そのときに今度は、わたしはほんとうにいい

お母さんにならう。今のお母さんはいろんなことを心配して、そして綴方を書いたり、歌を歌ったり、芝居をしたり、いろんなサークルの活動なんかを娘たちがやっていると、そんなことをするよりも一枚でも余計に和裁を縫って、お裁縫をして一枚でも余計に着物を作って、早くお嫁に行きなさいというようなことを心配している。だけどわたしたちがお母さんになったときには、ほんとうに娘の気持ちがわかるような、いいお母さんになる。そしてその次の、今度はわたしたちの娘や息子たちの時代に、ほんとうに農村をよくしてくれるような、娘たちや息子たちに期待をかけようというような、これも、先ほど読みました津大村の青年のように、気の長い形で、粘り強い形で歴史というものを見つめているわけです。そしてその娘たちが言うことは、「わたしたちは体の中に、お母さんたちの辛抱強さを受け継いでいる」って言っているんです。「今までの日本のお母さんたちはあきらめるために辛抱強かった。あきらめて辛抱強かった。けどもわたしたちはあきらめない。自分たちの生活をきりひらいてよくしていくために、その辛抱強さを使うんだ」ということをはっきり言っているわけです。

それからその次は都会の主婦の話ですけども、この主婦の場合に、二つの形がある、と思うんです。それは労働者のおかみさんたち、つまり昔でしたら小学校しか出ていないというおかみさんたちと、それから専門学校か、あるいは大学を出たインテリの主婦たちの場合。この二つの場合で相当にわたくしは、ものの考え方、それから生活記録の中で学び取っていくもののちがいが出てきていると思うんです。このちがいは、働いている人たち、男の人たちの間でもそれは見られるちがいだと思うんですけれども、労働者の主婦の場合には、書くものが非常に生き生きしているんです。具体的に、具体的な自分の生活体験を生き生きとつかむということ。これがとっても上手に作っているいますか、非常に自分の生活をありのままに書くと、そのまま生き生

きとしておもしろい文章が書ける、というような状態の中に生活しているわけです。

ところがその具体的な自分の体験というのが、どういうことを意味するのか、社会的にはどういう意味があるのか、歴史的にはどういう意味があるのか、自分の体験と人の体験をつなげてみるということができないわけなんです。だから自分のことしか考えられない。わたしは、わたしは、わたしはこうしましたっていうようなことは書きしているわけなんです。こういう人たちが生活記録運動の中で学んでいくことは、自分のことと人のことをつなげて考えるようにだんだんになっていく。自分のことと隣の人をつなげて考える。それから自分のことと自分の村のことを考える。それから自分のことと日本の社会とをつなげて考える。それから自分のことと世界のことをつないで考えるというふうに、だんだんにこの認識の輪を広くしていく。そして具体的な生活体験の中から、普遍的な認識にだんだんに到達すると、というような形をとっていくわけです。

それに対してインテリの主婦っていいますと、これは主婦の場合だけで今日は申し上げますけれども、わたしたち自身も含めて、専門学校や大学を出た人たちの場合は、これは男でも女でも同じだと思いうんですけれども、非常に最初、抽象的なんです。ものの言い方が概念的、抽象的で、中身がないっていうことなんです。ところがそれをだんだんにぶつけあう、生活記録運動というのはね、わたくしはやっぱりぶつけあうものだと思うんです。全然ちがう体験をしている、たとえば紡績工場の娘さんと、それから中流家庭のインテリの奥さんと、それから下町のおかみさんと。ちがいますね、考え方や生活体験が。そういうちがったものをお互いにぶつけあうと。そしてお互いに刺激しあう中から、自分と人との関係をだんだんに発見していくやり方だと思いうんですけれども。このインテリの主婦の場合は非常に抽象的、概念

的で、具体性がないわけなんです、最初、書くものは。それがだんだんに、生活記録運動の中で、みんな話したり、仲間の中でお互いに書きあったり、話しあったりしているうちに、だんだんに今度は具体的な事物に即してものを考える、という考え方を身につけてくる。そしてそれからまた具体的な事物に即してものを考えるようになって、それからまたもう一度、具体的な事物の中から普遍的な認識に到達するといいますか、手続きがちよつと込んでいくというふうにわたくしは思っています。

で、それは大変抽象的に言ったんですけれども、今度は具体的にいくつかの例をあげてみたいと思います。最初に労働者のおかみさんの書いたものを読んでみます。「残業」という題です。

ある朝、会社へ出かける夫が、空を眺めながら、
「おい、ラジオで今日の天気はなんと言ったんだ。傘をどうしようかなー。持っていこうかなー」
と、考えこんでいる。

「日中は曇りで、夕方からは降りますといったけれど、持って行かなくてもいいわよ。わたしが駅まで持つて行くわ。二時間残業か、四時間残業かをはっきりしてくれれば。」
と言うと、

「それがわからないんだよ。行ってみなければ二時間になるか、四時間になるか、仕事は山ほどきているから。」

と言う。ここ二カ月ばかり、夫は毎日二時間か、四時間の残業をしてきて、五時の定時までで、帰ってきたことがない。たまには早く帰ってきたいのだろうけれど、家計のやりくりを見ているから、一銭でも余分にかせようと、毎日残業してくるのだった。わたしは、とつさに、「今日は定時で帰ったらどう、たまには息抜きをしなくちゃ参っ

ちゃうもの。その時刻になったら駅へ迎えに行くから、傘は持つてゆかなくてもいいわよ。」

「うん、じゃ、しばらくぶりで定時にしよう。傘をたのむよ。」

と、そう言ってみたものの、夫はまた考え直したのか、

「やつぱり持つてゆこう。仕事もいつなくなるかわからないから。仕事があるときに残業しておこう」と、傘掛から、傘を外している。

夫といっしょに御飯をたべはじめた子どもたちは、まだお膳から離れない。そして長男は、またご飯をよそおうとしている。わたしは、

「まだたべているの。それで何杯目。」と、目をみはって聞いた。進は「これで五杯目だよ。」ちゃらっとしている。元子も「あたいは四杯目」と、にやにやしているし、安雄も朝子もおいしそうにたべている。

「これだもの、とうちゃんは残業しなくちゃならなくなってしまうわ。とうちゃんの残業分はみんなのお米代ね。」

たべものことで、たべ過ぎると文句を言ったことはないけれど、あんまりはかがいくと、がっかりしてしまう。すると進は

「そうだよ。とうちゃん、もうしばらくがんばってくれよ。残業頼むよ(会場笑)。ぼくは腹一ぱいたべないと気がすまないんだ。でも、みてみな、こんなに体が、がっちりしてきただろう。いまにぼくが働くよ。うんと働くからね。それまでとうちゃんががんばってくれよ、頼む(会場笑)。」

ひょうさんに両手を合わせておがむまねをしたので、夫は笑いがら傘をもつて出かけた⁽²⁰⁾。

生活をそのまんま書くとこんなにおもしろいんでね、わたしたちはうらやましくなっちゃうわけなんです、こういう生活をしている人たちを。それで会話、この人たちの文章の特徴は会話が非常に多いということと、人を描いている、とってもその生活の具体的なコマ、ひと

コマひとコマが生きているっていうことなんです。ところがその生活、なぜ残業をそんなにしなくちゃならないのかということ、なぜそんなに子どもを育てるのにお父さんが苦労しているのかということは、そういうことの意味は、何も書かれていない。ただそういうことがありました、こういうことをしましたっていう文章なんですね。

これに比べて、今度はインテリの主婦が最初に書いたのを読んでみます。これは「すきま風」っていうのです。

いまだかつて遊里の巷を知らぬ品行方正な夫なのに、金銭に淡泊でありながら、浪費もしない夫なのに、公務員の職務には驚くほど忠実で卑しい野心もまたぬ夫なのに、きちょうめんでまめな夫なのに、それなのに私の心をときどきおそろすきま風、心という不思議なものが真白く凍って、どこまでもどこまでも落下してゆく気持ち私を覚える。

確かに夫は愛してくれる。けれども妻だから愛してくれるのでは、私はすなおにうなづけない。私を私として愛してくれないかぎり。そしてひそやかな心がふつとつぶやく。私も、夫だから愛しているのかもしれない。こんな貧しい愛情、こんなみすばらしい愛情、それでは私は物たりない。もつとおおらかなものがほしい。与えても与えても尽きることのない豊かな愛であってほしい。夫の望むものと妻のほしいものとがうらはらになった時のわびしさ。二人三脚の足の乱れの苦しさ。そしてそれらの相違の底に沈む生き方の違いの悲劇。

考えることをしなければ幸福な妻の座にチンと座ってすましていられるのに、わざわざ自分から求めて静かな水面に石を投げる私は、愚かと呼ばれても仕方ないと思いながら、このごろ私は石を持つ手に力が……⁽²¹⁾

〈テープA面はここまで。以下、B面〉

……今までの日本の女の持ってきたいやたらしさといふようなものをね、しつかり表しているような文章なんです。いやたらしいけれども、それが実感だっていること。非常に空虚だけれども、これが実感だっていることがこの人の問題だと思うんです。中流のインテリの奥さんたちなんです。これを読みますとね、先ほど読みました、あの労働者のおかみさんたちがね、「あら、つまらないわ。あれ、いったい何を読んでいるの。わたしにはちつともわからない。あんなもの、ぜいたくだわ」というふうにな、すっかりペしゃんにきめつけてしまっただけです。実際、ほんとうにすきまもなく暮らしている、毎日生活に追われている主婦にとつては、こういう悩みはぜいたくだと言われても仕方がないかもしれないですけれども、この主婦にとつては何が悩ましいのか、何も痛いことも苦しいことも辛いこともないのに、それでも苦しい、それでも悩ましいというところに、問題があると思うんです。だけどとってもこの人は一生懸命になってこれを書いているわけなんです。で、この文章は名詞止めということ、なのに、なのに、なのに調だということ、詠嘆調「カ」だということで、ひとりごとですね。の、胸中を、典型的に表してる文章だと思うんです。これは家の中に一人が閉じこもって、そして家の中に夫や子どもたちと一緒に住んでるわけですけども、夫とはほんとうに話しあいができない。それから子どもたちとも話しあいができない。たくさん日本の家族と一緒に住みながら孤立している、孤独である、というような日本の妻の、今までの妻の姿を非常にあらわしているような文章の形態であり、内容であると思うんです。

そこで今度はこういう人たちがどんなふう、だんだんに成長したかということをお話したいんですけれども、ちょうどその内容が夫婦

の愛情ということになりましたので、ちよつとわたくしはここで労働者のおかみさんたちの夫婦の愛情についての考え方っていうのをちよつとお話してみたいと思うんですけれども。これはわたしたちが綴方をやっておりますときに学校の先生たちの研究会で、どなたかお母さんに来て、子どもの問題を話してほしいというご依頼があったんです。で、その先生たちの会合は新潟県の城崎⁽²⁾というところで開かれますので、東京からはどうしても一晩泊まりで行かなければならないんです。それでわたしたちは先ほど「残業」というのを読みました、あの奥さんに行っていたかどうかというふうにお願ひしたんです。

さて家に帰りましてご主人に言ったら、「いかん」っていうわけなんです。「歩いて行くところならよろしい」と。「電車で行くところは考えるよ。しかし汽車で行くところは絶対まかりならん」と(会場笑)、そういうふうにおっしゃったわけです。それで一晩中、わいわい、わいわい、他のおかみさんたちも説得に、おかみさんや弟「カ」さんや、いろんな人がわいわい来てね、一晩中討論した、大討論会をしたわけです。それが「絶対にいかん」。結局、そのおかみさんがね、「それでは、やめます」と言っただけです。

ところがねそのときね、おかみさんが「わたしは今度でしみじみ考えちゃった」って。「わたしはね、お父さんが出張するっていうときに、一晩とか二晩、家をあけても、一カ月あけてもね、ちつともさびしくない」と言うんですね。「まあ、いない方がいいわというような考えも少しはある」、というわけなんです。ところがね、わたしのお父さんは、一晩でもわたしを離したくないということはね、そんなに、うちのお父さんは愛情に飢えているのかと思つたら、とってもお父さんがかわいそうになった」と言うんですね。「だから、この愛情に飢えてる、このお父さん、もっともつと愛してやらなくちゃならない」と考えたと言っただけです。そしてこの夫の立場ということをね、もつと考

えるようになったんです、この奥様が。やっぱりこの綴方運動というのは、わたくしはやっぱり、人の立場に立ってものを見るということにも役に立つと思うんですけれども、家庭の中に女の人が閉じこもっている、外の、外でどんなに激しいたたかいは男がしているのか、社会で働くということがどんなに激しいたたかひなのかということをよく知らないということもあると思うんです。ところが男の人は、もちろん家の中で朝から晩まで子どもを育てたり食事の支度をしたりすることがどんなにつらいことかを知らないわけですね。で、お互いの立場を知らないからけんかしたりなんかするわけですけども、今度、主婦が家庭の外に出てまいりますと、この外に出る、社会の中で働くということの意味がどういふことなのか、ということがだんだんにわかってくるわけです。そして男の立場に立ってものを見るといふこともだんだんできてくるわけです。それだから今度は、「お父さんはこんなに愛情に飢えてるんだ、だからかわいそうだからもつともつと愛してやろう」というような気持ちが出てきたわけなんです。

そうしましたら今度はね、「わたしは負けて勝ちました」って、そのおかみさんが言ったんです。というのは自分が、それは二人のけんかじゃないけど討論会をやって、とうとう自分は行くことができなかつたんだけれども、それから一週間たつたら、主人が急にね「おい、今度の日曜日は家で子ども会をやろう」って言い始めたんです。今までは主人は外で働いてきて、「日曜日だけでも、もう家で休みたい。もう近所の子どもなんか家に連れ込んで子ども会なんかまつびらだ」って言うていたご主人がね「家で子ども会をやろう」っていうところまでわかつてくれた。そして幻燈やなんかを会社から借りてきてくれて、自分で幻燈を映したり、子どもたちを遊ばせてくれるようになった。それからこの生活を綴る会のような会合には一カ月に一度、ちゃんと公然と公休日を主婦に与えて、そしてそのときは「おれが家でちゃんと番して

てやる。子どもたちを動物園に連れてつてやる。それから早く帰ってきてご飯の支度もしてやる」というようなことまで言ってくれるようになったって言うんですね。「だからわたしは、やっぱり負けて勝ちました」ということを言ったんです。

で、わたくしはこのことをとっても大事だと思ったんですけども、わたしたちもこういう綴方をやっていくときに、たくさんの夫婦げんかが出てきて、わたくしなんかもずいぶんどなり込まれまして、「いたい、何してるんだ。お前、家庭を破壊するのか」っていうようなことでしかられたこともあるんです。だけれどもやっぱりその中で、だんだんお互いの立場をわかりあっていく。そして今までほんとうに話しあいをしたり、心と心がふれあわなかつた夫と妻が、書くということを通して、もつと深いところまで話しあいができるようになった、というようなこと。そしてそれを通して男の人も、家庭の民主化というようなことばがよくありますけれども、公休日をやるとか、それから主婦が外へ出るときには自分で家事をやってくれるとか、そういうようなふうに、だんだんお母さんが勉強する、外に出ることを男の人も承認してくれるようになってきたわけです⁽²⁾。

そこで、これは余談ですけども、今度は下町のおかみさんが、先ほどの「残業」を書いた、その下町のおかみさんのお隣に住んでるおかみさんなんですけれども、その人が三年たちまして、書いた綴方を読みます。これはPTAの問題なんですけれども、ちょうど、子どもさんが行ってる中学校の十五周年記念に五〇万円かけて式典をやる。そのために三百円ずつ寄付を集めろ、というようことを言ってきたわけなんです。そこで、このことを、「とても三百円も、そんなことにお金を使うのはもったいない。第一自分は出せない」といって、お寺さんに集まって主婦たちが反対、ブツブツ、まあ不平を言ったわけなんです。ところが、そのPTAの会議をちゃんと開いて、そこで決め

るという席に行ったら、そのお寺に集まった主婦たちが出てこない。そしてこれは黒須さんっていう人ですけれども、ガラス職工のおかみさんですけども、その人が一人、「さあ、大変」というんで、飛んで行ったという話なんです。で、「会議室」って、これはPTAの会議やるところです。「会議室」には、道了様に集った顔ぶれは七、八人しか来ておりません」。道了様ってのはお寺です。

とつくに時間はすぎているのにと、わたしはそーっとあたりを見廻して、はっとしました。わたしの、はす向い側にすばらしい金の腕時計と、指一本かくれるように大きな宝石の指輪が目にとまりました。まわりにいる人達はみんなきれいな着物を着た人たちです。わたしは急に自分の姿をかえりみました。カスリのモンペに黒い上っばりその上にカッポー着をかけてきたのです。こういうことで気劣りがしていたとき開会のあいさつを兼ねた報告があつてPTA会長のお話を聞いていると、しごくもつともな案ばかりです。(中略。以下、元の綴方を鶴見が省略して読んでいるところは、中略と表記)

道了様が集ったときあんなに反対の意見をいいながら、いざの場合には会合にも出てこないし、早く誰か何かならないかしら、わたしにはとてもこういうえらい先生がたや金時計のおくさんのいる前では何もいえない、困ったとおもつていると、(中略)「御婦人方の御意見は」という会長の声にわたしはなにが言いたくて、言いたくてたまらないのですが、指輪をこれみよがしになでたり、さすったりしているおくさまの前では、いかにもひけ目をかんでいうことができません。そのうちに足はがたがた、胸はときどきして目がくらみそうになってきました。なにか言わなければいけない、なにか言ったらいいかしら、早く言おう、言わなければせっかく来たかないがない。「御婦人方はなにも意見がないのですか、なにかおっしゃってください

い」という再度の会長の声にわたしはおもわず手を上げてしまいました。「はい、どうぞ」という会長のことばに、はっとしたわたしは、足がふるえるので机につかまってようよう立ち上りました。

というのは、もう巨大な奥さんなんです、太つて(会場笑)²⁴。

校長、会長、各先生方は一せいにわたしのほうを見ますので、また胸がときどきはじめたのです。これではいけない、とふるえる声をおさえてただ無我夢中で一気にしゃべってしまいました。わたしは言うだけ言うとはっとして腰をおろしました。するとまた一人の女の人が立ちあがり、やっぱり困ると言い、反対の声がだんだん高くなって、それまでは校長の案で一世帯三〇〇円ということになっていたのが、もみにもんで一口五〇円を六カ月払いということに決まって(会場笑)家に帰ったのが十一時頃でした(会場笑)。

それから一週間ばかりたつて子どもを守る会の会合がお医者さんの家でありました。このときPTAの会合に出席したおかあさん達と顔をあわせたところに、「黒須さん、この間はすごかったわね。あのとき校長はてつきり話がうまくまとまるかとおもっていたのに、あんたにきめつけられて、ぶるぶるふるえていたわ。特に終りの言葉は真にせまっていたわよ。(中略)」と言うのでした。

わたしは「いやです、いやです、絶対にいやです」と最後に言ったことだけはよくおぼえているのですが(会場笑)、その他は何を言ったか全く記憶がありません。また終わりの言葉が真にせまっていたというのですが、わたしには切実な問題なのでどうしても反対しなければならなかったのです。いまわたしの家では、夫の給料が遅配で余分なお金を出せないし、また出したいくないのです。また近所には配給のお米も取れなくて、日ぜにをもらってきては、スイトンや

パンばかり食べて暮らしているという家もあるのです。わたしは、この寄付金のことから考えたのですが、これからも正しいとおもうことは勇気を出してどんどん発言してゆこうとおもっています⁽²⁶⁾。

これは、この黒須さんっていうおかみさんは小学校を出たつきりです。そして全然この二十年間、結婚してから二十年間、鉛筆を持ったことがないという主婦が、最初書いたものが「学童疎開」という戦争体験です。それをみんなの前で書いて、そしてみんなの前で読んで、そしてそれが、この『エンピツをにぎる主婦』という本の中に出されて、で、みんなからはめられた、というより感動をさせたわけなんです⁽²⁶⁾。それからもう「はてなあ」と思って考えたわけなんです。自分はほんとうに値打ちのないものだ、つまらないものだと思って、今まで一生暮らしてきた。小さくなって暮らし…、まあ大きい体ですからあんまり小さくもなれませんが（会場笑）、暮らしてきた。ところが、それを書いたらね、みんながこんなにびっくりした。じゃあわたしもそんなに捨てたもんでもないかもしれない。そんなにつまらないものでもないのかもしれない、ということ、だんだん自信が出てきたんです。それで、このPTAの会合にも行って、ちゃんと人の前で自分の意見が言える、というだけの自信がついたわけなんです。

そこでこれはおもしろいと思うことは、先ほど読みました「残業」というのと、あれは初期に書かれたものですけれども、これは黒須さんじゃなくてお隣の人が書いたものですけども、それとちよつとちがつてるところが出てきてるわけです。「残業」には自分のことしか書いてなし、自分の家のことしか考えてないわけです。ところがこの黒須さんの場合には、この文章では、自分の家では給料が遅配だと。その次に、「また近所には配給のお米も取れなくて、日ぜにをもらってきては、スイートンやパンばかり食べて暮らしているという家もある」というこ

と。自分の家は困ってる。だけれども近所ではたくさん困ってる人がいるんだ、っていうことなんです。つまり自分が困っているっていうことと、他の家が困っているっていうことをつなげて考えるという、自分のことだけじゃなくて人のこととも、共通の問題意識を持てる、というような考えが出てきたということがひとつ。それから自分が発言した、そしてそれが通った、という体験の中から、今度は一般に立って、「この寄付金のことから考えたのですが、これからも正しいとおもうことは勇気を出してどんどん発言してゆこうとおもいます」。つまり、自分のさやかな体験の中から、自分だけが困ってるんじゃないくて、他の人も困っているんだ。だから自分がみんなの困っている考えを代表して言えば、他の人が一緒にあって立ち上がって言ってくれるんだ。そしてみんなと一緒に束になったときには、自分の考えていることは、実現の可能性があるんだということを、この人は一般に立ってつかみ取ることができるようになった。つまり自分の個人的な体験からだんだんに一般的認識ってこれは大げさですけども、考えにまとめて、考える、考えに到達していく、ひとつの過程だと思うんです。

それでは今度は、先ほど読みました津村さんという人の最初の「すきま風」ですね、全部、抽象的なものを書いていた。その人は、今度は一年半たつたらどういう文章を書き始めたか。あの人は、あの文章を書いてすぐに、仲間の中へ入ってきたわけです。そしてみんなで綴方を書きあい、話しあいしている中に、一年半たつて、次のような文章が出てきたんです。これは今、わたしたちのグループのお母さんたちはみんな戦争体験を去年から書き始めております。その戦争体験を書いた中のひとつなんですけど、その津村さんのを読んでみます。これも非常に長いものですから、途中をはしょってちよいちよいと読んでみます。

舅は実業家はだの人で、私立学校わたくしを経営し、夫も父親のもとで教職に就いておりました。単純なわたしは、校長先生というものは人格の高い立派な人と、公式的に解釈しておりましたので、その校長先生の舅が、金属回収には土蔵の中に忘れられたようにある古い釜さえ出すことを惜しみ、農産物の供出も、なにかとごまかし、村の土蔵の白壁は敵機の見標になるから、むしろを掛けたり色を塗ったりして、目だたぬようにとの申し合せにも、平然として白壁のまま放置しておく様子に、内心、軽蔑と怒りとを強く感じておりました。金属回収の報らせがあると、わたしは自分の持物はせつせと供出しましたが、婚家のものはわたしの自由になりません。そんな父を表だって責めるわけにも、嫁の身ではないかず、ほこ先きを夫へ向けたこともありました。(中略)

国民学校四年生であつた上の子が、姑やわたしたちと食事のとき、「僕の家にはね、缶詰が二十七個ある。東京には時々配給があるのに、田舎にはちよつともないのね」

と、子どもらしく、自分の家のことをしゃべつたことがありました。

(中略)

なにもないはずの東京の家に、田舎ではもう久しく見ることもできない缶詰が二十七個もあると聞かされ、さすがにおとなしい姑が、そのときは、額に青い筋を出して、

「もらつてゆくばかりでなく、たまにはおばあさんと言つて、缶詰の一つや二つ持つて来るもんだよ」

と、物心もつかぬ孫に向かって、怒りをぶちまけたことがあります。

(中略)

結局、そうして小利口に立回つていた人は、小さな指輪一つも失わず、戦後の世の中では、またその人なりに利口に泳ぎ、馬鹿を見ないでくらししております。わたしはそういう人に対して、うらやま

しいとは露ほども思いませんが、我欲を通した舅や、親戚の、それらの人々のとつた態度のほうが、お国一途と生きた正直者よりも、結果においては、正しかったのではないかという問題を弟から出されて、すっかりこたえているのです。

先日、(中略) 弟と、戦争責任の話になつたとき、

「たとえ、自分に偽りが全然なくても、おれたち(わたしを含めて)の取つた態度、また思つたことは、悪いことであつた。エゴイズムからでも、戦争に協力しなかつた人のほうが正しかったのだ」

と、弟が言いました。そのときわたしはムキになつて、

「いや、わたしはそうは思わない。戦争をはじめから否定し、知性ある節操で消極的にでも反対の姿勢をとつた人々に対しては、もちろん心の底から頭を下げるけれど、それとは別の人々の中でも責任をとつて自決した阿南陸相²⁷のようなあり方はどうしても立派に思え、戦争悪をはつきりと認識しておりながら、時の政府の前に声をひそめて生きていて、戦後になつてからわたしは弱い人間ですなんてひとりごとを言つて、きずのつかない程度に自分をあばいて満足しているインテリのあり方の方がよっぽど不潔でいやだわ」と答えました。

「姉さんらしいナ」

と、ちよつと間をおいて、

「では二・二六の若い将校たちは、やつぱり正しいということになるの?」

と聞くのです。わたしは、

「思慮が浅かつたとは思ふけれど、生き方としては、私というものを捨てた純粹さと、動機の正しさをどうしても認めたいわ」

「あの人たちには気の毒だけれど、やはりいけないと思うんだ」

どうして? という気持で弟を見つめるわたしに、

「例をひけばね。いま流行の新興宗教に夢中になっている人々が、自分はピュアな気持ちで信仰し、選挙の際にはその宗教から立候補した人々に、正しいと思って投票し、政治がその宗教の色にされてしまおうとしたときに、その人々のやったことは、はたして悪くなかったかということだね。動機さえ正しければ許せるとすれば、泥棒だって許せる場合もあることになってしまう」

弟のことばの前でわたしは考え込んでしまいました。自分を投げ出して隣組のために夜も寝ないで尽くした組長さんよりも、たった一個の缶詰さえ年老いた母親にさえ与えることのできなかったエゴイズムで、国へ協力しなかった嫁のほうが、結果から見ると正しかったとされてしまう事実の前で、わたしは苦しくなってしまうのです。

(中略)

あれほど美しくあることを希み、正しく生きるべく努めても、無知であった場合、わたしのさげすむ生き方をした人々よりも悪となってしまう場合もあるという厳しい事実をわたしは見つめねばなりません。

ただ、無知ゆえに、わたしの行為は零以下にされてしまったのです。無知ということは、どれほど美しい動機から生れても、根のない仇花となりうる恐ろしいものであるということを、つくづくと顧み、戦争に対して、無知の責任を強く感じないわけにはいきません⁽²⁸⁾。

これはこの奥さんが一年半後に書いた綴方です。文章ということからいうと、非常に動きが多くなっている。対話で思想が発展している、ということがひとつの特徴です。それからやはり数量的な把握が出てきている、ということ、もうひとつのことの域から、ぎょうさんな、大げさな形容詞というものがなくなつて、事実を客観的に見る、そして動きのある文章を書く、具体的に書くという、話しかけの文章の形

態に移っているということがひとつの特徴だと思えます。

それからもうひとつは、それが、この戦争責任という問題で、非常に大事な問題を、ここを出していると思うんです。無知ということ。つまり知らないということに対して、わたしたちは責任を取らなければならぬのではないか、という問題です。そしてその瞬間瞬間はどんなに正しく、どんなに美しく、誠実に生きていても、その瞬間瞬間の誠実さは、もしその人が歴史の見通し、社会の認識というものを持たないならば、客観的に見て正しくない、偽りになる、ということ、ここではつきりと出していることです。で、戦争責任については、もう去年あたりからジャーナリズムでもずいぶん騒がれておりますし⁽²⁹⁾、わたしたちもお互いにみんな考えている問題だと思えます。ただ、どこの奥さんは、こういったジャーナリズムに刺激されてというよりも、自分自身で、自分自身の体験をつきつめて、ここまで考えてきた。そして人から教えられたり、与えられた思想ではなくって、借りものの思想ではない自分自身の思想を、借りもののことはではない自分自身のことばでつきつめて考えてみよう、そしてそれをまちがっていいからぶつけて、そして自分の正しい考え方に到達しようという、努力が非常にこの中ではつきり出ていると思うんです。

そして知らないということに対して責任を取らなくちゃならないんじゃないかという考え方、これはわたしたちのグループでもずいぶん、議論しあったんですけれども、どうやったら無知ということに対して責任を取れるかっていったら、知ること、知ることになるっていうこと以外、責任の取りようがないわけです。そのためにこの綴方のお母さんたちは、ただ綴方を書いているということだけでなくて、一人では勉強ができないから、わたしたちはグループを作って勉強をしようということ、綴方から学習へという学習運動をいろいろな形でやっております。たとえば国際情勢の勉強をするとか、あるいは憲法の学

習をするとか、それからお母さんたちと教師が一緒になって子どもの教科書を勉強する。つまり新しい教科書の内容というものについてお母さんたちが、教科書がいいとか悪いとか政治家が言っているけれども、それは政治家が言っていることが正しいのかどうか、そして今の教科書がわたしたちの時代の教科書よりいいと言えるのか、悪いと言えるのか、自分自身の目でみきわめよう。そしてもし今の教科書が足りないものならば、自分たち自身の考えを盛り込んでいったらいいし、教科書を作るために学者と協力しようというような考えの中から、お母さんたちの教科書の勉強もされております。このように書くということは、何を知らないのかを、自分の知らないことを知ると、いうことのために必要だと、いうことができると思うんです³⁰。

それで最後に、わたくしはひとつ、わたしたちのお母さんたちと一緒に、去年一〇月の一日に砂川に、ちょうど激しい衝突のありました日に砂川にまいりました³¹。このときのことを、ちょっと最後にお話したいと思うんです。わたしたちのグループが、この綴方を書いている東京のお母さんたち、おかみさんたち、その人たちと一緒に、あの日、行きました。で、そのときはわたしたちのグループには、東京の乾物屋のおかみさんで望月さんという人がいたんですけれども、わたしたちは女ですから遠巻きにしていなくちゃならないわけです。で、ちようどわたしたちが見ているところで、警官が鉄カブトをかぶって、そして棍棒を持って、そしてただ鉢巻きするだけで何にも武器を持たない、若い学生さんたちや労働者の人たちが、こうスクラムを組んで座っている。そこをこう一人ずつはずしていくわけですね。そして警官がこう二つにトンネルを作ってその間をずっとこう送りわたしていくわけです。一人一人引っこ抜いちゃ送りわたして、その間に棍棒でこづいたり、けったり、ぶんなぐったりして、もう最後のところではもうクッタクタに、半死半生の状態で出てくるわけです。それをわた

したちはそばで手を●●●●●●(聴き取り不能)、どうすることもできない。そこでただ見てるだけなんです。で、そのときに最後に出てきたときに、若い学生の人を、もう警官がいつせいに担いでね、拉致しようとしたんです。そうしましたら、その乾物屋のおかみさんの望月さんが急に走っていきましてね、そして警官の後ろに手をかけてね、「返して下さい、それはわたしの息子です」って言ったんです。そしてわたしたちもびっくりしたんですけれど、警官がびっくりしましてね、ひよっと振り向いてね、「ほんとうか？」って言ったんです。そして今度はおっさんみたいな、年を取った指揮官みたいなのが寄ってきて、「ひるむな、かかれ、かかれ」って言って連れてってしまった。それはもうほんとうに瞬間の出来事なんです。

それでもう終わってしまったことなんですけれども、その後でそのお母さんが、綴方を、そのときのことを書いています³²。そしてそのお母さんは、あそこに行ってみたら、どの子どもどの子ども、どの子どももっていったらおかしいですけどね、みんな砂川に来てた人は若い学生さんや労働者です。どの人もどの人も自分の息子に見えてきたっていうんですね、それを見ていたら。そしてたまらなくなつてね、わが子でも何でもない、もう自然に「わたしの息子ですから返して下さい」って言うてしがみついた、というわけなんです。

で、そのことは、何か、とっても新しいことがそこに誕生した、ということじゃないかと思うんです。というのは、そのお母さんは、日常生活の中では、他のお母さんたちと同じお母さんで、自分の子どもがよくないというだけ、日夜、願ってるお母さんです。ですから人の子どもはけおとしても自分の子どもだけ有名校に入ればいいと、人の子どもはけおとしても自分の子どもだけ大会社に入ればいい、ということをや、日夜、念願している、そういうお母さんです。それが、あそこ砂川に行ったときに、急に、家族利己主義といいますが、

家族利己主義の垣が急に崩れて、そして、そこにいる息子たちが全部自分の息子たちだという気持ちに、体がなってしまったわけなんです。頭で考えたものじゃ全然ないわけなんです。感情でなってしまうたということなんです。で、そこへ来ていた息子たちは、何も自分のお母さんではないけれども、自分、この砂川のおばさんたち。それは自分たちのお母さんであるように、その人たちの土地を守ろう、その人たちを守ろうという気持ちで来ていたわけですから、これは大げさといえば、日本の息子たちと日本のお母さんたちが、家族利己心という垣をはずして、ひろやかな大きな愛情で結ばれた瞬間だということも、できると思うんです⁽³³⁾。

そしてもうひとつ考えてみますと、去年、一昨年の第一回の砂川の衝突のときは、砂川の人たちは、自分のご祖先、ご祖先様の伝統のこの土地をわたしは守ると言ってる、自分の土地を守るためにそこに、自分の土地の上に座り込んだわけです。ところが去年のたたかいのときになりますと、そうじゃないんだ。自分の土地を守ることだけではないんだ。日本中から外国の基地をなくすということがなければ、ほんとうに平和は守れないんだという、これは理性的な認識だと思うんですけども、そういう理性的な認識に到達したと。それから東京のお母さん。この乾物屋のおかみさんの望月さんが、日本の息子たちはみんな、日本のお母さんたちの息子たちなんだという感性的な、ひろやかな愛情に、感性的な認識に到達した。この二つのものが結びついて、今度は新しくお母さんとの息子たちが新しい歴史を作るひとつの力になるといいますか、そういう形が生まれたんだと思うんです。

でそのことは今、先ほど親孝行の問題を申し上げましたけれども、今、このことは愛国心というような問題、愛国心と親孝行というのは、今、道徳教育の二つの大きな柱になっておりますけれども、愛国心というような問題も、やはりこういう立場からもう一度考え直してみる。つ

まり何のための愛国心なのか。わたしたちはほんとうに自分たちの子どもたちを、お母さんたちを、子どもたちを、夫たちを、みんな、平和に幸福に暮らすために、愛国心というものを、そういうものを、愛国心を、わたしたちはこれから育てようとしているので、戦争をするための愛国心を作ろうとしているのではないんだと思うんです。だけれども、それが理屈ではなくって、あの砂川の一〇月一三日のたたかいの中で、そのような形で新しい考え方、感じ方が芽生えてきたということとは、これはそこに居あわせた人たちも、そこに居あわせない人たちも、みんな国民全体にかかわる、非常に大事な思想的なきっかけではないかと思うんです。

そこでこの綴方の、生活記録の問題ですけれども、わたくしは生活記録の運動というのは何かと申しますと、これは『母の歴史』だとか、それからいろいろな生活記録が出ておりますけれども、これは学者が今までたくさん歴史を、学者が書いてまいりました。ことに『昭和史』が出来ましてから、歴史をいかに書くかということが非常に問題にされております。昭和史は骨組みだけはあるけれども、血が通っていない。そこに人間がいらないというような批判が生まれたり、現代史をいかに書くかという論争が去年あたりからずっと続けられております⁽³⁴⁾。これと特に結びつけて考えるわけでもないのですけれども、生活記録運動というのは、わたしたち、働いている人たちや、おかみさんや、娘たちや、青年たちや、そういう無名の人たちが毎日、歴史を築いていく力だとしたらば、そういう歴史を作っている人たちが自分自身のお父さん、お母さんのこと、おじいさん、おばあさんのこと、そして自分の生活のことを、書く。そしてそれが一人で書くのではなくて、みんなと一緒に書く、ということを通して、それをたばねて、国民が、国民の歴史を書く運動であると、いうふうに言っているのではないかと思うんです。

そしてただ書くというのではなくて、その書いたり、勉強しあったり、話しあったり、行動していく中で、自己を拡大していくと申しますか、自分の体験を、人の体験、そして日本の社会全体の体験、あるいは世界の人々の体験と結びつけて認識する。個別的な認識を普遍的なものと結びつけて、社会的なものと結びつけて認識する、というふうに認識の輪を徐々に、それはほんとうに、わずか、少しずつですけど、先ほどの黒須さんのおかみさんのようにほんとうにちよつと、ちよつとつていうだけでですけども、少しずつ拡大しながら、そして自分自身の悪いところと申しますか、考えと行動とが一致しないというようなところを、だんだんにあらためながら、そしてわたしたちが、今、今までに、たびたびふらふらしてきた、あつちに、左行ったり、右行ったり、右行ったり、左行ったり、つまり右往左往してきた。わたしたちがつていうよりも、むしろ日本の文化人といわれる人たちとか、学者、思想家といわれる人たち。わたしたちの責任だと思えますけれども、そういうふらふらしてきたところを直していく。そういうような国民が国民の悪い根性をあらためていくのが革命であるというようなことを、中国の魯迅が言っておりますけれども、わたしたち自身がわたしたち自身の悪い根性をあらためながら、わたしたちの歴史を書いていく。そういう運動だというふうに言っているのではないかと思います。

どうもお暑いところを長い間、辛抱して聞いていただきました(会場拍手)。

注

1. 高知市夏季大学のこと。夏季大学はその後も継続され、二〇二二年(第六二回)にも十名の講師を招いて開催されている。
2. 鶴見和子編『エンピツをにぎる主婦』は毎日新聞社より一九五四

年に刊行されている。

3. 鶴見和子は高知県内各地での講演と、中村市で開かれる「高知作文の会」(十一月二五日)への出席のため、一九五五年十一月二二日から二六日まで、高知県内に滞在した。十一月二日には高知市教組の招きにより「新しい人間の生き方について」と題する講演会を高知市内でおこなっており、要旨が一九五五年十一月二六日付『高知新聞』に掲載されている。

4. 鈴木三重吉(一八八二―一九三六)は小説家、児童文学者。日本の児童文学の発展に大きな貢献をした児童雑誌『赤い鳥』は一九一八年七月一日創刊。

5. 本名、笹岡忠義。一八九七―一九三七。高知師範学校卒業後、同県下の小学校で生活綴方教育を実践、その後上京し、第二次『綴方生活』(一九三〇年一月―三七年二月)を主宰した。

6. 『綴方生活』は、一九二九年一〇月、志垣寛を編集人として創刊されたが、翌三〇年一〇月から小砂丘忠義が編集人となり、生活綴方教育の中心となった。

7. 日中戦争の進展とともに生活綴方運動は左翼運動とみなされ、一九四〇年から四二年にかけて、治安維持法違反などで、運動に参加した教師たち約三百人が検挙された。

8. 無着成恭(一九二七―)。無着が山形県山元中学校教諭時代にまとめた文集『山びこ学校』は、青銅社より一九五一年三月に刊行されている。

9. 国分一太郎(一九一一―一九八五)。戦前から生活綴方運動に取り組み、戦後は日本作文の会の結成(一九五〇年)に参加、生活綴方・生活記録運動の指導者的役割をはたした。『新しい綴方教室』は日本評論社より一九五一年二月に刊行されている。

10. 第一回作文教育協議会は、一九五二年八月一日―三日、岐阜県中

津川市で開催された。

11. 鶴見和子『生活綴方教育にまなぶ』鶴見和子『生活記録運動のなかで』未来社、一九六三年、一八頁(初出は『図書』一九五二年一〇月号)。

12. 鶴見和子を中心に一九五二年八月から活動を始めた「生活をつづる会」のことをさしている。なお、「生活をつづる会」という名称がつけられたのは、一九五三年五月のことである。

13. 高知県幡多郡津大村(当時)須崎。津大村はその後、一九五八年四月に江川崎村と合併して西土佐村となり、さらに二〇〇五年四月、中村市と合併し四万十市となった。高知県内に同じ名前の須崎市があつてややこしいが、須崎は津大村の中の一集落名である。

14. ガリ版刷りの『夜学会』は、須崎校下夜学運営委員会編集部編として、一九五二年九月一日付で第一号が創刊され、一九五七年一月二五日付で第一九号が発行されたところまで確認できる。当時、『夜学会』は全国の青年団活動の中でも高く評価されており、今井正敏は、一九五五年二月に開催された第一回青年問題研究大会での発表を、「とくに、その中でも、多くの反響を呼んだのは、高知県幡多群津合村須崎の部落青年団の『夜学会』における生活つづり方の学習でした。ガリ版ずりの機関紙『夜学会』が、ありふれた文芸集から、だんだんと山びこ学校のような生活つづり方の発表誌に変わっていったいきさつを発表したのですが、これなどは、りっぱに生活記録の成果を、いつわりなく実証したものと

いうことがいえましよう」と評している(今井正敏「青年団の生活記録運動のあゆみ」日本生活記録研究会『青年と生活記録』百合出版、一九五六年、五三頁)。なお『夜学会』は、二〇〇五年三月、西土佐村が中村市と合併し、四万十市が発足するにさいし、西土佐村教育委員会から復刻合冊され、『夜学会―須崎校下夜学の記録―』

として刊行されている。

15. 上崎由一「死んだ方が良いんじゃないか」須崎校下夜学運営委員会『機関誌 夜学会』一一、一九五五年、一二頁(西土佐村教育委員会『夜学会―須崎校下夜学の記録―』二〇〇五年、三〇八頁)。

16. 新改訂「石かけ」須崎校下夜学運営委員会『機関誌 夜学会』一三、一九五五年、三〇四頁(西土佐村教育委員会『夜学会―須崎校下夜学の記録―』二〇〇五年、三四三頁。なお、原文は一部をのぞいて「石かけ」となっているが、鶴見和子は「石がけ」と読んでいる。

17. 三重県四日市市の東亜紡織泊工場で働く女子工員たちのあいだで生活綴方を書くという運動は、一九五二年の春ころから始まり、一九五四年に「生活を記録する会」が結成された。

18. 文集『私の家』は一九五二年六月、『私のお母さん』は一九五三年三月、『母の歴史』は一九五三年二月に発行された。

19. 鶴見和子「女三代の記 ―製糸・紡績で働いた祖母と母と娘―」(『コレクション 鶴見和子曼荼羅Ⅱ 人の巻―日本人のライフ・ヒストリー』藤原書店、一九九八年、所収。初出は『婦人公論』一九五七年一〇月号)に、同様の記述が見られる(四三〇頁)。また、布団を打ち直すさいに真綿が引つ張れないという綴方は、金子栄子「お母さん」(東亜紡織泊労働組合婦人部「私のお母さん」、一九五三年、二八頁。生活を記録する会編『紡績女子工員生活記録集 第1巻 私の家・母の歴史』日本図書センター、二〇〇二年、所収)。

20. 中村ゆき「残業」。生活をつづる会『おかあさんと生活綴方』百合出版、一九五七年、一三〇―一三二頁。

21. 津村しの「すきま風」。生活をつづる会『おかあさんと生活綴方』、一三〇―一四頁。

22. 一九五四年八月、第三回(第四回という記述も見られるが、『おか

- あさんと生活綴方」の年表にしたがった）教育科学研究会全国大会が兵庫県城崎町で開催され、生活をつづる会の木村たみ子が出席、「駄菓子屋の店先から」と題した報告をおこなった。一方で、鶴見和子は同年夏に開催された新潟作文の会にも参加しており、ここではこの二つの会を混同していると思われる。
- 23 以上のエピソードについては、生活をつづる会「おかあさんと生活綴方」、一二五―一二九頁に、加生富美子が「『家庭で』―下町の主婦―」と題して書いている（初出は『文学の創造と鑑賞』第3巻・岩波書店）。
- 24 黒須つる子は『エンピツをにぎる主婦』のなかで「十九貫もある大きなからだをゆすぶりながら」と描かれている（二九頁）。
- 25 黒須つる子「わたしの発言」。生活をつづる会『おかあさんと生活綴方』、一四六―一五〇頁。
- 26 黒須つる子「学童疎開」。鶴見和子編『エンピツをにぎる主婦』毎日新聞社、一九五四年、一四―三一頁。「学童疎開」は生活をつづる会を代表する綴方作品として、生活をつづる会『おかあさんと生活綴方』（百合出版、一九五七年）や鶴見和子・牧瀬菊枝編『ひき裂かれて―母の戦争体験』（筑摩書房、一九五九年）、鶴見和子『生活記録運動のなかで』（未来社、一九六三）などでも紹介されている。
- 27 阿南惟幾（一八八七―一九四五）。陸軍軍人。一九四五年四月に鈴木貫太郎内閣の陸相となる。ポツダム宣言受諾後、陸相官邸で割腹自殺した。なお、出版された「無知の責任」では、「阿南陸相」が「軍人」となっている（鶴見和子・牧瀬菊枝編『ひき裂かれて―母の戦争体験』筑摩書房、一九五九年、五五頁）。
- 28 津村しの「無知の責任」。鶴見和子・牧瀬菊枝編『ひき裂かれて―母の戦争体験』、五三―六七頁（初出は文集『母の戦争体験』ひなたグループ、一九五八年、一一四―一二〇頁）。鶴見和子も講演中で話しているように、この綴方は「途中をはしょってちよいちよいと読んで」いるため、出版されたものとはかなり異同がある。この異同については、高知での講演の方が出版より早い時期になされているため、出版にあたって加筆訂正された可能性も考えられる。そのため、この綴方の引用だけは、出版されたものではなく、鶴見和子の話した内容にしたがった。
- 29 吉本隆明・武井昭夫『文学者の戦争責任』淡路出版、一九五六年、など。
- 30 鶴見和子は「生活記録の文体」（鶴見和子『生活記録運動のなかで』所収）で、津村しの「すきま風」、中村ゆき「残業」、津村しの「無知の責任」の三作を対比させて論じている（一八五―一八九頁）。「生活記録の文体」の初出は一九五七年九月二日付『日本読書新聞』で、高知での講演と執筆時期が重なっている。
- 31 一九五五年から五七年にかけて、東京都北多摩郡砂川町でおこった、米軍立川基地拡張に反対する闘争。砂川町民だけでなく、学生・労働者が支援した。一九五六年一〇月一三日は、強制測量で反対派と警察隊が衝突。双方で二六四人の負傷者が出た。この日、鶴見和子は生活をつづる会のメンバー数名と炊き出しの手伝いとして参加していた。
- 32 当事者である望月寿美子の「砂川で」と題した綴方を以下に引用する。
- けれど先方のもみ合いは激しく私達の目の前を頭を割られたかのような血まみれの顔の学生や口から血を流している労組員をそれぞれ七・八人もの警官がこん棒をふり上げながら検束してくる。その外救護班の女子学生が次々と沢山の怪我人を運んでくる。足に血を流している人又は歩行も出来ない人を背負つて

来る者。二・三人の手で運ばれて来る意識不明の学生など。救護所となつた役場は階下から二階迄一杯よとここまで伝わつて来る怪我人の様子は私達を悲しませた。まるで戦場だ。基地拡張の為の測量を体一つで防いでいる人たちが警官の新手くゝに鉄カブトのつばやこん棒でいためつけられ、防ぎ疲れてすつかり傷ついた同朋をこん棒の力でひきづつて行く警官の仕打に情なく思つた私は「それは家の子です」と持つていた洋傘で警官を追つた。一時サツと手のゆるみをみせた若い警官も目をする間に数を増してその学生の頭の血も知らぬ顔に両手を引き腰を押して無理やりに連れ去つたらしい。私は洋傘を持ち直している間にすつかり大勢の人にとり巻かれながら「あの子達がなぜあんなに頑張るのか判りませんか？ 皆な戦争がいやなのです。私達も、再び子供に戦争をさせたくありません」と精一杯。不覚の涙が頬を伝わつた（ひなたグループ『ひなた 1』一九五七年、二九～三〇頁）。

鶴見和子は、砂川でのいきさつに関しては同様のことを、生活をつづる会『おかあさんと生活綴方』の中で書いている。（二三〇～二三一頁）。

一九五五年に刊行された、遠山茂樹・今井清一・藤原彰『昭和史』（岩波新書）をめぐつておこなわれた論争。評論家・亀井勝一郎が『昭和史』を、人間が描かれていないと批判。それに対して、井上清、江口朴郎らが反論し、松田道雄、山室静、竹山道雄らが亀井に同調するなど、歴史学者だけでなく、評論家、政治学者、哲学者なども巻き込んだ論戦となつた。

